

六

俳句雑誌

花

りつか

8

*designed by Tomoko Tanaka*



訪  
戴



山田六甲

梅雨の蝶すこし破れてをりにけり  
熊蝉に生まれて吾に泣きつくか  
凌霄花のぼたぼた故郷猫をどり  
絵手紙に描きやうのなし涼風は  
団扇から丹波の風が生まれたり  
蚊帳の中ふとんに泳ぐ子供かな

割箸を股裂きの刑海の家  
大仏の立ち上がりたる大暑かな  
まひまひの廻りて水の濁りけり  
芋の露へリコプターが過ぎてゆく  
湯上がりの頭搔きある浴衣の子  
字に惚れて手紙に惚れて梅雨さなか  
山崎の奥は五月雨弟子の弟子  
無礼者扇にこんな句を書いて  
蛇苺ほんまに食べてしまふとは  
揚げ花火煙に当たり壊れけり

無鑑査同人作品

# 六 卿 集

(五十音順送り)

健次の忌

中村 房枝

上げ汐の夕べ精霊蜻蛉かな  
なによりも厨涼しく父母の家  
一間だけ簾半分上げてあり  
百日を風船葛守として  
やどかりの爪搔き中上健次の忌

古  
草  
鳴海 清美

古草へてのひら青く差し出せり  
 花の枝震へてゐたり練り神輿  
 宝塔の鎖鳴りづめ山笑ふ  
 浦日和籠に啼かせて春の鳥  
 たんぽぽの絮飛び立てり見送りぬ

花  
筵  
ニ瓶 洋子

恋の猫闇の磔を躲しけり  
 真夜中の春満月に星一つ  
 花筵物見櫓の跡にかな  
 楽市や花人誰も立ち寄らず  
 一つ根の八樹の桜吹雪かな

# 更衣小さく風をたたみけり

貝森 光大

青き踏む一步もためらいなかりけり

殻までも薬用効果しじみ貝

露の葉を転がる雨滴友逝けり

母の貌なぞらえるかに蝸牛

更衣は年に二回行うが、「和漢朗詠集」などすべて夏の題としているところから俳句でも夏の季題。掲句、今までの衣類をしまうとき、風を一緒に小さくたたみ込んだ。更衣は衣類だけでなく季節の風まで入れ替える。風も衣も纏うという共通表現があることをふまえていることに注目。「風をたたみ」という斬新な表現で更衣を捉えた。

# 桜葉花残骸の上に降る

ことり

落椿鳴咽の花粉吐きいたる

羊水に四散してゆく花筏

わたくしの壊れる音が春の雨

子宮からた走る宇宙春の闇

掲句の季題は「桜しべ降る」。  
花残骸は、作者の造語か。季題で  
いえば「落花」の傍題「花の塵」「花  
屑」だが、おそらくそのまま使うと  
リズムが整わないから花残骸とい  
言葉を探り出したのだろう。  
形としては凡兆の「下京や」に似  
ているが、類句類想と責められぬ句  
の強さを持つている。彼女は今、月  
に八百句以上出来るといふ。

同人作品

# 楳木集



五月

延川五十昭

さゞなみに風吹きわたる五月かな  
魚掬う子らの手網に若葉光  
棧道に郭公の声澄みわたる  
さかさまに青葉を映す湖面かな  
コンビニの弁当で食う筍ご飯

柿若葉

西塚 成代

つつじ山

馬場美智子

五月晴歩調合わせし二人連れ  
柿若葉坪庭包む薄明り  
安売りの旗翻り雛燕  
曇天に溶け込んでをり花水木  
蚕豆の皺押し潰す同窓会

大空を泳ぎ疲れて鯉のぼり  
新緑の光を浴びる歩も軽し  
イヤリング緑の風に揺れており  
車椅子押されて登るつつじ山  
マニキュアの指でつまんで春いちご

# 菜根譚



六甲

更衣小さく風をたたみけり 貝森 光大  
桜薬花残骸の上に降る ことり

夢風撰今回は二名

さざなみに風吹きわたる五月かな 延川五十昭

子規に、六月をきれいな風の吹くことよ、という句があるが五月もまた清々しい風の吹く月で掲句、さざなみのと言えば風が吹いていることなのだが、さざ波が立つ風よりも少し強く気持ちの良い風が水面を走っていったというのである。清々しさの強調である。

指を折るベンチに二人のこり藤 松下 幸恵

藤棚の下で指を折っている二人、指切りではないので恋人同士とも考えられず、そこで俳句を作る者には至極当たり前の風景で、定型のリズムが整っているかどうか確かめているのである。これは秋元不死男先生や檜紀代先生もしておられたと目撃譚を聞いた。はてさて、二人は俳人だったのか、とがっかりしないで、のこり藤という言葉のおもしろさに注

目しよう。藤の遅れ咲きを、のこり藤として、まるで二人にとっては残り福であるかのように聞こえるおもしろさがある。

切先の胸に近づく菖蒲風呂 宮森 毅

切っ先とは刃物の尖った最先端部、刃の先転じて言葉による鋭い攻撃という意味も含む。まさか菖蒲の葉の先が胸に刺さったからといって身の危険でもあるまいが、読者はこの句の場面を想像してチクリとする痛みを予感するのだ。葉の先と言わず切っ先と言うのは表現の技巧ではなく技術で、菖蒲の葉との重複や煩わしさを避けたのである。

入梅や介護手帳の届きし日 水谷ひさ江

認めたくない物がやってきた。とも受け取れるし、ああこまで来たのだなあ、今までよく頑張ってきたよなあという感慨とも受け取れるし、そこはそれ読者の心境に当てはめて味わえはいい作品だ。因みに今年どこかの遊園地であなたは無料ですと言われてショックを受けた経験がある。

だが、去年から毎年歳を一つずつ取ることになったから来年は五十八になる計算だ。(以下略)

会員作品

# 六花集



近藤 貞子

漁夫の足泣き砂はやしつづつ踊る  
盆の砂父の型のひとりかな  
小さき傘役立つ夜や地蔵盆  
眠る子の寝言の中の赤とんぼ  
赤まんま険しき山を遊び場に

筒井八重子

夏霞 鳴門海峡渦巻ける  
峠より広がる伊予は麦の秋  
分け入れば長く伸びたる夏蕨  
野も山も風渡りをる子供の日  
幾年も押入れ住ひ鯉幟

若柳すずめ

山つつじ生きる力をみなぎらす  
夏空へ飛び立つ気球に乗りたかり  
今の世に何故に生まれた夏嵐  
病床の寂しさ紛らすレース編み  
革細工きれいな薔薇になりにつけり